

記憶のない。

重み継ぎ

目が開く。視界が出来、広がる。まだ視界は広がっただけで、ぼやぼやとした世界が広がっている。この感覚に疑問をもつことは無かった。

キューインという耳障りな音が鳴っている。どこかで。頭が重い。

おそらく、自分は「起きた」のだと思う。この感覚を説明するに値する言葉がそれしか見つからなかった。ただ私は横になっているわけではない。座っているのだと思う。これは足の感覚、臀部の感覚、腰の感覚、背中の感覚、首の感覚からそう判断した。あぐらをアレンジしたような姿勢でいることがわかった。あぐらから右足を立てて、体を前傾姿勢にしてその立った右膝に右肩を押し付ける。左ひじを左太ももに乗せ、右手を右足の甲に置く。首は傾き、頭は地面を向いている。自分は寝落ちでもしたのだろうか。

ただ一向に視界が晴れない。キューインという音はまだ鳴っているが、少し音は静かになったように思う。目を閉じたり開けたりする。視界は変わらない。首を何度も回転させてみたり上や下に向けてみたり。変わらない。よくよく見れば埃や塵のようなものが視界を覆っていることが分かった。それに気が付くと、自分は目をこする

ように右手の甲を目に当てる。

ギギギと関節が軋みをあげる。自分は一体どれくらい寝ていたのだろうか。想定していたよりも右手の甲は硬く、目も硬い。ごつごつした甲が目と触れ合うたびに視界からゴミが取り除かれていく。少し目の周辺に負荷がかかっているが問題は無い。そんなことより、音が気になった。皮膚をこすりつける音はこんな音だったか。起きたばかりだから耳が少しおかしいのだろうか。まだ聞こえるキューインは耳鳴りだろう。頭は重い。

視界からゴミがなくなる。そろそろいいかと思い、右手を目から話す。またギギギと鳴る。まだピントが合わないのか、自分の右手は水の中にあるように見える。目を何度か開け閉め、シパシパしようとする。閉じてくる眼が見える。埃が舞う。ピントが合いはつきりした世界が見える。床が見える。コンクリートのような灰色で硬そうな床。こんな場所で寝たのかという感想を思いつく、ことはなく思考が遮断される。自分は下を向いていた。姿勢から考えるに視界には自分の体が映るはずだった。

さっき自分の目をこすった右手は、肌は無く皮は無く肉も無く爪もない。浮き出る血管もない。自分は手を動かしてみ。目の前の機械的な部品の塊が動く。自分の考えた通りに。灰色だ。黒い部品も混じっている。自分の手は作られたものということが分かった。幸い五本指で

あつた。同じような四本の指に少し離れて親指らしきものが付いている。

足も機械的な部品の塊だった。腰も腹も首も。

手だけならばよかった。よかったというのは少しおかしいのかもしれない。自分はそもそも人間だっただろうか。

ここでようやく自分が何も思い出せないことに気づいた。名前は何か、いつ生まれたか、家族はいたか、性別は何か。自分は人間だったか。自分の歴史がない。自分を自分であると思えるものがない。しかし自分はここにいる。そのことが自分に立つ理由をくれた。おそらく何らかの原因で記憶がなくなったのだと判断した。ギギギイと音がする。キューーンという音はしない。起動時の冷却ファンでも鳴っていたのだろうか。なんとなく顔を確認しなくなった。周りに鏡のようなものは無く、ここがくず鉄となった機械の倉庫のようなものであると理解した。適当に反射しそうな機械の部品を手でこする。埃や塵が覆い重なっていたが、ちよつとだけうすぼんやりと反射するようになった。人の顔ではない。人のようなところは目のような光るものが上部に二つあるだけだった。自分はロボットである。名前は知らない。自分が人のように勘違いしていたのは、人が作った言葉を使っていたからかもしれない。ロボットや機械は大抵、役割を持って生まれるものだ。その役割を自分は知らない。